

令和元年度

ほがらか家族

明るい家庭づくり作文集

(瀬戸内市優秀賞受賞作品)



瀬戸内市教育委員会

岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会

はじめに

公益社団法人岡山県青少年育成県民会議及び岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会では、家庭の役割、家族のあり方など、「明るい家庭づくり」をテーマとした作文を募集しており、家庭教育等の重要性について意識の向上に努めております。

令和元年度は、瀬戸内市内で1,081点の応募作品があり、その中から瀬戸内市の優秀賞14点、優良賞26点及び佳作賞82点を選定しました。

この文集「ほがらか家族」は、瀬戸内市の優秀賞作品を掲載したものです。この文集が、家庭の教育力の向上の一助となり、青少年の健全育成につながることを心から願っております。

令和2年2月

瀬戸内市教育委員会 教育長 東南 信行
岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会 会長 神坂 俊規

瀬戸内市優秀賞一覧

〔小学生の部〕

題 名	所 属	氏 名
ぼくのおとうと	邑久小学校 1年	近藤大智
かわいいいもうと	邑久小学校 2年	畑 咲都
ふるさと	国府小学校 3年	内海杏莉
ぼくの兄弟	行幸小学校 4年	山本 健
ひいおばあちゃんがくれたもの	邑久小学校 5年	日笠彰亮
「ぼくと弟の夏休みふんとう記II」	国府小学校 6年	竹内 柊

〔中学生の部〕

我が家の物作り	牛窓中学校 1年	神宝有栖
父の優しさ	邑久中学校 2年	明石彩夏
「私のひいおばあちゃん」	長船中学校 3年	福武 結

〔保護者の部〕

家族記念日	牛窓東小学校	山根 亜生
「悪戦苦闘の家庭づくり」	牛窓北小学校	菅原宏都
『木村さんと愉快的仲間たち』	邑久小学校	木村佳苗
バースデーイベント	今城小学校	永守志帆
ガチャマシ	行幸小学校	清水絵美

小学生の部



ぼくのおとうと

邑久小学校 1年 近藤 大智

ぼくには、一さいとしがはなれたおとうとがいます。

このなつ、おばあちゃんからもらったすいかが、とてもおいしかったので、おとうとといっしょににわにすいかがのたねをうえることにしました。

げんかんのまえに、すこっぷであなをほって、たくさんなたねをうえました。そのときぼくは、すいかがのたねにたくさんみずをあげて、大きくなってほしいとおもいました。

なにちかしてすいかがのめがでているのを、ぼくはいちばんにみつけました。でも、おとうとがさいしょにみつけたほうがよるこぶとおもい、ないしょにしました。おとうとは、すいかがのめがでているのをみつけて

「あっ、めがでている。」

と、大きなこえでいい、とてもうれしそうでした。

まいあさほいくえんにいくまえ、おとうとはすいかがをみています。つるがのびたりはながさくと、ぼくにおしえにきてくれるので、とてもうれしいきもちになります。

このまえ、ぼくはすいかがのみがなっているのをいちばんにみつけました。でも、おとうとにはまたないしょにしました。すいかがのみがなっているのをみつけたおとうとは、

「すいかがのみがなってる。」

と、大ごえでぼくをよびました。おとうとは、うれしくてとびはねていました。おかあさんも大よろこびして、すまほでしゃしんをとっていました。

大よろこびしているおとうとをみて、ぼくのないしょのさくせんは、大せいこうしたとおもいました。

まいあさ、

「大きくなったかなあ。」

といって、おとうとはすいかがをながめています。

すいかがのみが大きくなったら、かぞくみんなでたべたいです。

らいねんも、おとうとといっしょにすいかがのたねをうえたいです。



かわいいいもうと

邑久小学校 2年 畑 咲都

「ただいま。」

ぼくが小学校からかえってくると、おかあさんと二人のいもうとが出むかえてくれます。

ぼくには、ようちえんへかよういもうとと、きょ年のあきにうまれたいもうとがいます。小さいいもうとは、かぞくみんなからゆきちゃんとはよばれていて、すこしずつ大きくなっています。まだことばが話せないの、ないいろいろなことをしらせてくれます。

「うわーん、うわーん。」

ゆきちゃんがなきはじめました。

まずぼくはおむつがぬれて気持ちわるいのかたしかめます。つぎに、おなかがすいた時には口をうごかすので、ぼくのゆびを近づけてみます。それでもなき止まない時は、だっこをしてゆらします。

「さきとは小さなおとうさんみたいじゃな。ありがとう。」

と、おかあさんがよろこんでくれます。

いろいろお世わをしているうちに、ぼくは、ゆきちゃんのかおや目を、かんさつするようになりました。

あるあさ、学校へ行く前にぼくのかっている金魚のエサやりへ、つれて行きました。金魚を見ると、

「きゃー。きゃー。」

と、大きな声を出すので、ぼくは、

「金魚かわいいね。おなかがすいたのかな。」

と声をかけました。すると、ゆきちゃんは、また声を出してキラキラした目で金魚をじっと見えます。ことばは話せないけれど、ぼくの言っていることがつたわったみたいで、とてもうれしい気持ちになりました。

まだ小さいもうとですが、ごはんをたべるようになったり、ぼくにつかまって立とうとしたり、どんどんせい長しています。大きくなったら、外でサッカーをいっしょにしたいです。

これからも、かぞくみんなで小さなゆきちゃんを大切にしたいです。



ふるさと

国府小学校 3年 内海 杏莉

「ありちゃん、発表会に出てみましょう。」

とピアノの先生が、わたしに声をかけてきた。

発表会に出るのははじめてだったので、ちょっときんちょうするなと思ったけど、大ぜいの人の前でピアノをひいてみたかったので、エントリーする事に決めた。発表会でひく曲は、先生が用意してくれる事になっていたけど、わたしはどうしてもひきたい曲があった。

それは、「ふるさと」というわすれられないふる里の風けいを、歌っている曲だ。わたしには、たった一人のひいばあちゃんがいます。わたしのお母さんの名前は、もうわすれてしまっているが、わたしと弟が会いに行くと「わたしはだれでしょうクイズ」をするとゆっくりだけど名前を当てられる。

もう一つとく意な事は、歌を歌うこと。中でも「ふるさと」は、会いに行くとかならず歌ってくれる。わたしのピアノに合わせて、ばあちゃんが歌ってくれたらうれしいなと思って、先生におねがいをした。

その日から、少しでもうまくひけるように時間を見つけて練習をした。

発表会には、わたしの家族と祖母が、聞きに来てくれた。ばあちゃんは、しせつに入っているので、会場に来ることは出来なかった。

きんちょうして少しひきまちがえてしまったけれど、とてもよいけいけんが出た。でも、わたしの本番は、「ばあちゃんに歌ってもらう事」。そしてその時がやってきた。

夏休みになり、たからづかにすんでいるはとこがとまりに来てくれた。オーケストラに入っているはとこは、

「いっしょに歌いたい。」

と言ってくれたので、家でいっしょに練習をした。弟は、かしをまちがえないように、紙に書いて、ばあちゃんのしせつに持って行った。ばあちゃんのお部屋で、ばあちゃんをみんなでかこんだ。わたしが、

「ばあちゃんもいっしょに歌ってください。」

とばあちゃんの耳にとどくように、元気な声をかけてから、ピアノをひき始めた。わたしのピアノに合わせて、みんなが歌っていた。

ばあちゃんは、大きな口を開けて楽しそうに歌ってくれていた。お母さんたちもいっしょに歌っていた。歌い終わるとばあちゃんが、

「じょうずなあ。」

と言ってきて、とてもうれしかった。お話しをすることが、なかなか出来ないばあちゃんから出たその言葉に、みんながしあわせな気持ちになり、大きなはく手が聞こえた。

わたしのピアノは、まだまだじょうずではないけれど、ばあちゃんとみんなをつなぐ「しあわせ」のかけはしだ。

「ばあちゃん、これからもいっしょにたくさん歌おうね。」



ぼくの兄弟

行幸小学校 4年 山本 健

ぼくには、中学校二年生の姉と小学校一年生の弟がいる。ぼくは、三人兄弟のまん中である。真ん中はつらい。姉にはいじめられ、弟をいじめるとしかられる。なのに、弟がぼくをなぐつても、弟はしかられない。だから、ストレスがたまる。

もし、ぼくが一番下だったなら、もっと幸せだったろうか。ぼくが弟だったなら、ぼくが泣けば、お母さんもお姉ちゃんもぼくをかばってくれるだろう。だけど、弟は、いつもおもちゃも服もお下がりがりだから、弟もつらいと思う。

では、ぼくが一番上だったら、もっと幸せだったろうか。何でもえらそうにできるし、弟や姉をけんかで負かすこともできる。だけど、お母さんは、

「弟の世話をして。」

と言うだろう。また、

「お兄ちゃんなんだから、がまんして。」

とも言うだろう。だからお兄ちゃんもつらいと思う。

では、ぼくが一人っ子だったら、もっと幸せだったろうか。一人っ子だったなら、おもちゃもおかしも服も全部が、ぼくの物になる。だけど、カードゲームもオセロも一人じゃできない。だから、一人っ子もつらいと思う。

弟は、ぼくが二才の時に生まれた。小さいころはかわいかったらしいが、ぼくはあまりおぼえていない。弟が歩くようになり、しゃべるようになり、姉のことは「お姉ちゃん。」とよぶのに、ぼくのことを「たける。」とよびすてにするようになった。弟は、ぼくのすることに何でもきょう味を示すようになり、ぼくが好きになった物は、弟も好きになった。今では、弟と毎日ゲームをしたり、遊んだりするのが当たり前になっている。だから、弟が友達の家に行っているのがっかり

する。それくらい、ぼくにとって弟はかけがえのないものになっている。

姉は、ぼくよりも四才年上だ。姉は、勉強ができるし、運動もできるし、けんかも強い。ぼくがお姉ちゃんに勝てるものなんて無いはずだった。でも最近、歴史の知識だったら姉に勝てた。すごくうれしい。姉はおこるところわいけど、ぼくがこけて血だらけになったとき、家までつれて帰ってくれた。たまにやさしいところがある。姉はこわいけど、ぼくたち弟の世話をしてくれる。宿題を手伝ってくれる。

やっぱり、姉と弟は、ぼくにとって必要なんだ。ぼくは、つらい真ん中だけど、とても幸せな真ん中なんだ。姉と弟がいてくれて、本当によかった。



ひいおばあちゃんがくれたもの

邑久小学校 5年 日笠 彰亮

今年の六月四日の朝、ひいおばあちゃんが亡くなった。その日、おばあちゃんの「大きいおばあさんの調子が良くないから起きて。」

という声で目が覚め、用意をして病院に行った。着くと、看護師さんから「しっかり声をかけてあげてください。」

と言われた。家族みんなで

「ひいおばあちゃん大好きよ。」

と声をかけると、モニターの心拍数が動いた。

「よう頑張ったなあ、あっぱれだったよ。」

「ありがとう。」

と声をかけると、モニターがはげしく動いた。ぼくは、みんなの声が伝わっているんだなとびっくりした。家族が見守っている中、ひいおばあちゃんは、息を引き取った。

そう式の日、ひいおばあちゃんの大好きだった、美空ひばりの「川の流れるように」と「愛さんさん」が流れた。妹がそれに合わせて歌い出すと、お母さんが、口をふさいで歌うのを止めようとした。だけど、おばあちゃんが

「手をはなして自由にしてやって。」

と言うと、また歌い出した。みんなその歌声にじーンとしてしまった。そう式では、ひいおばあちゃんの百さいを祝うために式場の人ケケーキを用意してくれた。妹は、おめでとうと言いながら手をたたいて声をかけた。きっとひいおばあちゃんは、みんなに祝ってもらえてうれしいだろうなとぼくは思った。

のう骨が近くなった日に、みんなで墓のそうじに行った。そこで、お兄ちゃんとおじいちゃんが墓を一生けん命みがいていた。ぼくも手伝おうと、水を何回も運んで流した。とてもきれいになって、気持ちよかった。

のう骨の日になると、お墓で骨つぼから、さらしに包んでいたひいおばあちゃんの骨を入れた。黒のかさをさして、骨に日光を当てないようにして、お墓におさめた。

ぼくは、ひいおばあちゃんが亡くなってから、見たことや体験したことのないようなことばかりでびっくりすることがたくさんあった。一番おどろいたのは、そう式でのお骨拾いだ。火そう場で、骨を拾ったときに思ったよりボロボロで少なくてびっくりした。やっぱり百年生きるってすごいな、がんばったんだなと思った。ぼくは、十一年しか生きていないのに、一度死にたいと思ったことがある。だけど、戦争や病気に負けずに生きて、ひいおばあちゃんのように強く生

きていこうと思った。

今年は初盆なので、夜は家族でお経を上げて、く養をしている。ひいおばあちゃんが亡くなったことは悲しいけれど、ひいおばあちゃんが教えてくれたことを大切にして、これからはがんばろうと思う。



「ぼくと弟の夏休みふんとう記Ⅱ」

国府小学校 6年 竹内 柊

三年前にふんとう記Ⅰを書いたときより、生意気度もわがまま度もパワーアップした弟と留守番をする夏休みが今年もやってきた。

だけど、今年は楽しみなこともある。一つは、午後になればそれぞれ遊びに出かけていいことだ。もう一つは、ぼくが昼ご飯を作っていいことだ。料理は楽しいし、一人で作ってみたいとお母さんに言うと、

「ぜひやってみよう。もう六年生なんだし、一人で何か作れた方がいいよ。」

と大賛成してくれた。相談の結果、炒飯を作ってみることに決めた。何度か一しよに試作して、家族みんながおいしいと言ってくれる炒飯を作ることができた。ところが、昼ご飯の前に難関がある。ダラダラしている弟と宿題をすることだ。まじめにやるぼくの前で机をゆらしたり、足をけつてきたり、消しゴムをちぎって投げてきたりすることもある。そんな弟にイライラして、宿題もなかなか進まない。

その日も、「弟なんて相手にしない。さっさと宿題を終わらせて炒飯を作ろう。そして、友達と楽しく遊ぶんだ。」と自分に言い聞かせていた。

でも、いざ一人で炒飯を作るとなると、とてもきん張した。記憶を一生けん命呼びもどし、フライパンの横にたくさんこぼしてしまったけど、なんとかかぼくの「ウインナーと玉子とネギの炒飯」が完成した。めずらしく弟は、

「この炒飯めちゃうまい。」

と喜んでくれて、ぼくはとてもうれしかった。

食べ終わって、ぼくが遊びに行こうとすると、まだ食べていた弟が、少しさみしそうな顔をした。弟も三年生になったから、学区内は自由に遊びに行ける。でも誰とも約束をしていなくて、一人になってしまうのだ。ぼくは、迷った。友達との約束もある。遊びに行きたいという気持ちも強かった。でも、ぼくは遊びに行くのをやめた。実は、弟の誕生日だったからだ。弟は何も聞かなかったけど、うれしそうにゆっくり炒飯を食べていた。

夕方、お母さんが仕事から帰ると、ぼくがいることを不思議に思い聞いてきた。理由を話すと、とても優しい顔で

「ありがとう。優しいお兄ちゃんじゃな。」

と言って、友達のお母さんに遊びに行けなかった理由を伝えてくれた。それを聞いていたからか弟は、お母さんに

「今日の柊君の炒飯最高にうまかった。」

と言ってくれた。

すぐすねるし、生意気になった弟と口げんかは増えたけど、一人で留守番より二人の方が心強いし、やっぱり楽しい。頼りになるお兄ちゃんになったとお母さんとお父さんにほめられたことは弟には内緒だ。すねるとめんどくさいから。でも、次はどんな炒飯を作ってやろうかな。

中学生の部



我が家の物作り

牛窓中学校 1年 神宝 有栖

「ただいま。」

私の母は、私の小さい時からずっと家にいてくれる。友達のお母さんは仕事をしているので、小学生の時など遊びにさそうと、

「お留守番せんといけんから。」

「今日、お母さんいないから。」

と、言われることが多かった。でも、そのかわり、

「有栖の家は、お母さんがいていいな～。宿題とか教えてもらって。」

と、言われることもあった。今日も、

「おかえり。」

と、母の声が返ってきた。

一日練習から帰ると何だかいいにおいがした。小学生の時は、

「有栖～。おやつにパン焼いてあげたよ。」

というのが月一回ぐらいあった。でも、中学生になって、部活もあって家に帰るのが、六時すぎでしまうから、おやつは食べない。でも今日は、あのにおいがしている。パンの香ばしいにおいと、もう一つカレーのにおいがした。母が、

「この間のドライカレーが残っていたから、焼カレーパンにしてみたんよ。」

と、言った。一日練習で少し早く帰っていたからおいしそうなおい一つぐらいと食べるとカレーがまだ熱くておいしかった。一つと思って食べ始めたが、二つも食べてしまった。それぐらい久しぶりの母のパンはおいしかった。母は、何でも作れるパーフェクトな人ではない。失敗もよくしている。携帯で、何やらやっている母をのぞきこむと、

「おからたくさんもらったから何かおかし作ろうかと思って。前、作ったのはあんまりおいしくなかったから。何かいいレシピ探してみよんよ。」

と、おからパウンドケーキのページを見ていた。これに決めたらしく早速作りだした母。台所から、いいにおいがしていた。今回のパウンドケーキは、母が好きな合格レシピとしてレシピメモに残していた。母は、いろいろ考えたり、調べたりして料理をしている。

それは、好きなさいほうや工作にもみられる。小学校低学年の頃だろうけどダンボールでままごと遊びみたいな事をしていた。これなべ、これフライパンといって、ダンボールで何だかんだ作って。それを見ていた母が、何やらこそこそ作りだした。ダンボールを何枚も円に切り、それをまた何枚か輪に切りぬいた。なべを作ってくれていたのだ。このなべは、持ち手もあれば、ふたもあるし、中に物も入る。本当になべだった。その後は、ガスコンロも作ってくれた。

ダンボール工作をしたかと思うと、

「この短パン、おしりに穴空いとるがん。もうすてんといけんな。」

と、洗たく物をたたみながら私に言った。

「だめ、お気に入りなんだからまだはく。」

と、言う私に母は、

「この短パン、有栖で三代目だからなあ。ひざならダメージ加工でいいかもしれんけど、おしりじゃなあ。パンツ見えるよ。」

と、言う母に私は、

「捨てんでよ。」

と、言ったけど、きつと捨てられてもうはけないと思っていた。そんな会話をして何日かした頃、母は何だか作り始めた。また何か始めたんだろうと私は思った。でもそれは、私のための物だった。

「有栖、これならはずかしくないじゃろ。」

と、出してきたのは、すてると言っていた短パンだった。毛糸の花モチーフが、おしりについている。一つは、穴の空いた所をカバーするように大きなモチーフ。一つだとおかしいから、小さなモチーフをバランスよく配置してある。私のお気に入りの短パンは、今もまだはいている。

母の物作りの原点は、「もったいない」なのかもしれない。残ったドライカレーや、たくさんいただいたおからだったり、ダンボールだったり、捨てるはずの短パンだったりする。そして何より物作りが好きだという事。母は、それに加えて考え・工夫する事を忘れない。

私は、そんな母の血をしっかり受け継いでいるようで、毎日スライムと格闘している。そんな私を見て、

「だれの子ならあ〜。」

と、笑いながら言う父。母の血だ。工作にいたっては、夜少し時間があれば台所で始めてしまう私を、母は笑って見守ってくれる。時には、兄も加わったりして、台所が工作室になってしまう。

「もったいない」から始まる工作室は、母に見守られながら、考え、工夫へと進化していく。



父の優しさ

邑久中学校 2年 明石 彩夏

父はとても厳格な人です。普段私たち家族の前で笑うことはほとんどなくいかにも「昭和の父」という感じです。年も六十を超えておりおじいちゃんの間違えられることも少なくはありませんでした。くわえて格好もあまり気にしていないため、今どきありえないような服装ばかりしています。正直そんな父のことを私は恥ずかしいと感じていました。周りの友達のお父さんは若くて優しくてカッコいい人ばかり。それに比べてうちの父は若くもなければいつも仏頂面で特別カッコいい訳でもありません。そんなある日父との間に事件が起こりました。それは小学校の授業参観の日のこと。仕事の都合で急に来れなくなった母の代わりにその日は父が来ることになっていました。私はあまり気がすすまなかったものの母がどうしてもというのでやむを得ず父が来ることを承諾しました。流石に今日は授業参観なんだから少しは格好に気をつけてくれるだろう。そう思いながらドアにちらちら目をやり私は授業を受けていました。そのとき「ガラガラッ」と勢いよく音をたててドアが開いたかと思うと薄汚れた作業服を着た父が現れました。髪はぼさぼさ、顔もところどころ黒ずんでおりとても授業参観に来るような格好ではありません。あっちこっちから「あれ誰のおじいちゃん?」「いや老けてるけどお父さんじゃね?」

そんな声が私の耳に入ってきます。もう恥ずかしくていてもたってもいられませんでした。一刻も早くこの場から逃げだしたい。そんな思いでした。父はというと周りの声が耳に入っていないのかそれとも聞こえないふりをしているのか変わらずいつもの仏頂面でした。そして父は私の思いをよそに結局授業の終わりまで教室に居座っていました。私は家に帰るなり母に文句をたれこみました。

「なんで父さんこさしたん!私めっちゃ恥ずかしかったんじゃないけど!」

母も返す言葉がなかったらしくずっと黙りこんでいました。するとちょうどそこに父が帰ってきました。普段そんなに父に抗弁することのできない私でしたが今日の出来事については別でした。づかづかとおかえりも言わず父の前に立ちはだかると父の顔を見つめました。言いたいことは山ほどあったはずでした。でもいざ父の顔を目の前にするとなかなか言葉がでてきません。数秒ほど黙りこんだあと私からでてきた言葉は

「もう絶対来んでな」

の一言だけでした。そのときの父のどこか寂しそうなその目は今でも忘れることができません。

あの出来事から三年がたち私は十四才となりました。中学生になり父と話す機会はますます減り顔を合わすことすら少なくなっていたそんな時、私は母から父の財布をとってくるよう頼まれました。急ぎ足で部屋にむかい父のかばんをあさりました。そうしてあさっているとかばんのポケットの中にハガキほどの小さな紙が入っていることに気づきました。何だろう。興味本位でその紙をポケットから取り出しました。するとそれは私が6才ごろ父の誕生日にあげた手紙でした。まだ覚えてたの平仮名で必死に書いたその手紙。なんでこんなもん入れてんの。私は普段みることのできない父の可愛い姿に思わず笑ってしまいました。結局その後財布は見つかり私が父にその出来事について話すことはなく今でも秘密にしています。

父は私のことなんてどうでもいいんだ。そう思っていた自分でしたがちゃんと自分は大切にされているんだということをこの出来事をきに知ることができました。

「さりげなく支えるのが本当の優しさだと思う。」

これは歌手の中丸雄一さんの言葉です。この言葉のように父はおもてだって愛情を表現するような人ではないけれどいつもさりげなく支え、愛してくれていることを私は知っています。そんな父だからこそ家族を支え守っていくことができるのだと思います。

お父さん、いつも厳しくて全然笑わないし私の気持ち分かってくれないし正直むかつくところもたくさんあります。でもそれ以上に私の体調をさりげなく気づかせてくれたり何よりも家族のこと一番に考えてくれるお父さんが大好きです。いつも恥ずかしくてなかなか伝えられないけど本当はとっても感謝してるんだよ。

「ありがとう」そして「大好きだよ」



「私のひいおばあちゃん」

長船中学校 3年 福武 結

昨年十月、私の大好きなひいおばあちゃんが亡くなりました。九十二歳でした。

ひいおばあちゃんは、「ああちゃん」という愛称でみんなから親しまれていました。ああちゃんはとても優しく、話しているととても安心できる、そんな人でした。

毎年、私と妹のピアノの発表会に来てくれて、終わったあとにはいつも、「良かったよ、これからもがんばってね。」

と笑顔で言ってくれました。自分としては、今回はうまく弾けなかったなと思った曲でも、ああちゃんのその一言で、気持ちが安らぎました。毎年ああちゃんが私たちの発表会を楽しみにしてくれていたのです。どんな練習もがんばることができたのだと思います。

また、ああちゃんは習字が上手でした。小学校の時にあった習字の宿題も、ああちゃんに見てもらいながら書きました。いつもは優しいああちゃんでも、習字の時は一変して厳しくなります。

でも褒めてくれるときもあります。ああちゃんに褒めてもらいたくて、妹と競い合うように字を書きました。ああちゃんと一緒に書いた習字は、必ず何か賞が取れました。賞状をああちゃんに見せるととても喜んでくれました。姉妹とも習字で賞が取れたのは、ああちゃんのおかげです。これからは習字を教えることはできないけれど、賞を取ったら一番にああちゃんに報告したいと思います。

ああちゃんは九十過ぎとは思えないくらい元気でした。お買い物もたくさん行って、いろいろな物を買ってもらったし、一緒にご飯も食べたし、たくさんお話もしました。ああちゃんのあの楽しそうな笑顔は一生忘れることはありません。

我が家では、家族の誕生日会をしています。いつも私と妹が企画しています。ああちゃんも、毎年それを楽しみに参加してくれていました。十一月にはああちゃんの誕生日会です。みんなでお祝いをし、ああちゃんはいつもよりおいしそうにご飯を食べていました。私の家の誕生日会には必ず「ゲーム」があります。「あっち向いてホイ」や「伝言ゲーム」など、簡単なゲームですが、とても盛り上がります。ああちゃんは少し変わった「あっち向いてホイ」をします。じゃんけんをするまでは普通なのですが、その後が少し変わっていて、「あっち向いてホイ」と言わないで、ああちゃんはなぜか「あっち向いてホイ!ホイ!」と二回言って指を指していました。相手とリズムが合わず、「あっち向いてホイ」がうまく成立していないところが、見ている側としてはとてもおもしろいのです。そうするとみんなが笑って、空気がとても温かくなります。

また、「主役からの一言」というのも、我が家の誕生日会の定番です。ああちゃんが毎年必ず言っていたのは、「ありがとう」という言葉です。とてもうれしかったのか、涙ぐんでいました。そして、主役からの一言のあとに、私は、

「ああちゃん、これからも長生きしてね。」

と言います。するとああちゃんはしわいっぱいの顔をほころばせて笑顔になります。その言葉どおり、ああちゃんはとても長生きをしました。

昨年の8月に、親戚やいとこ家族が集まって長船スポーツ公園でテニス大会をしました。ああちゃんはコートサイドで、みんなを応援してくれました。その時に撮った笑顔いっぱいのああちゃんの写真は今、お仏壇に飾ってあります。テニス大会が終わった後、みんなでご飯を食べました。にぎやかで、ああちゃんはとても楽しそうでした。あのときのああちゃんの笑顔を忘れることはありません。

親戚やいとこが帰った数日後に、ああちゃんは急に倒れてしまいました。そのまま入院し、3日後、家に帰ってきたときには、もうあの元気さは無くなっていました。それでもああちゃんを笑顔にさせたくて、私はたくさんお話をしました。両親も、仕事から帰るとすぐそばに行っていました。食事がまともに喉を通らなくなった頃、ああちゃんが唯一口にしていたのが氷でした。私が食べさせてあげると、

「おいしい、おいしい」

と言ってゆっくり食べていました。それでも氷も食べられなくなっていき、十月四日の朝、静かに亡くなりました。悲しくて涙があふれ、私はなかなか現実を受け入れることができませんでした。でも、「ああちゃんは天国にいて、私たちを見てくれている」と思うと、悲しみが少しずつ薄らいでいく気がしました。

ああちゃんがいなくなった部屋はがらんとしてとても寂しくなりました。でも、いつでもああちゃんの声が聞こえてきそうです。ああちゃんから受け継いだ命。私の心の中にはいつも優しいああちゃんがいてくれます。

これからもいい報告ができるようにがんばるからね、これからもずっと見守っていてね。

保護者の部



家族記念日

牛窓東小学校 山根 亜生

我が家では、五月五日はこどもの日…ではなく、私たち夫婦の結婚記念日として、毎年家族皆でお祝いをする日になっている。今年は十年目という節目の年。前日の夜に主人と行き先を決めた。向かう先は、鳥取県にある三徳山三佛寺投入堂。日本一危険な国宝と言われている場所だ。結婚する前にも参拝し、「子どもができれば、いつか一緒に来たいね。」と話していた場所だ。

車内では、いつも主人が言うセリフ「今日は家族が始まった日だから、家族記念日だ。」から話が始まる。子どもたちからは、色々な質問が飛んでくる。今年初めて聞かれたことは、「どこが好きで結婚したん？」だった。クスッと笑えること、返答に困ること、毎年少しずつ質問が変わるのが面白い。そうこうしているうちに、あっという間に目的地に到着だ。

入峰修行受付所では、靴裏の点検がある。子どもたちには、四月におろしたばかりの学校の靴を履かせていた。よく見ると、二人共少し擦り減っている。四月に娘が入学し、二人揃って毎日登校班で歩いている姿を思い出す。その頑張りに胸が熱くなった。

入山してすぐに立ち足かかる数々の難所。慎重派の息子は、少し遠回りしてでもあまり無理なく通れる場所を選んで進む。逆におつちよこちよいな一面もあって、お喋りに夢中でヒヤッとする場面が何回かあった。そんな息子の後ろ姿を見ながら、「ああ、私に似ているな。」と思う。一方娘は、身軽でどんどん進んでいく。怖いもの知らずだが、その果敢な様が危なっかしい。そんな所は主人にそっくりだ。同じように育ててきたつもりでも、全く違う二人。その違いが面白い。

行き交う人との会話もまた、楽しみの一つだった。

「そっちを通った方がいいよ！」

「あと少し！頑張れ！」

様々な年代の人が声を掛けてくれる。子どもたちが中心となり、会話が始まる。時々、一人で子育てをしているような気がして塞ぐ時もあるけれど、周りには気にかけてくれる人が大勢いると改めて知ることができる。子どもたちが運んでくれたご縁を、私たちがいただいたこのあたたかい思いを、いつかまた誰かに返せばいいなあと思う。

頂上に着き、投入堂を目の前にした子どもたちの感想は、「えっ？これだけ？」だった。ビデオを回している私は、拍子抜けしてしまった。しかし、少し考えると子どもたちの気持ちも分かる。頑張って頑張って登った先にあったものは、子どもたちが思っている『素晴らしい』ものではなかったのだ。私たちが想像していた感想とは、かけ離れたことを言い放った子どもたち。「子育ては思ったようには進まないよ。」とされているようで、夫婦で笑ってしまった。

下山後に遙拝所から見た投入堂。その山の高さに、子どもたちは驚いていた。一步一步前に進めば、いつかは辿り着くのだ。それが思っていたものとは違う景色だとしても、進んできた道のりの中で、必ず得たものがある。小さな変化も、大きな変化も、柔軟に受け止められる自分でありたいと思う。

結婚して十年。昔、それぞれが持っていたペットボトルのお茶は、二本の水筒に変身し、主人の背負ったリュックサックの中で出番を待っている。そして出番が来ても、私たちの口に入る

のは、子どもたちの後だ。それでもその変化が、私たちにたくさんの幸せをもたらしてくれている。嬉しいことも悲しいことも、楽しいことも辛いことも、全てこの子たちがいなければ分からなかった『幸せ』がたくさんある。息子を授かった時、「子は鎧^{かすがい}じゃなくて、いつまでも、子は宝だと言える夫婦でいよう。」と言ってくれた主人。その言葉を改めて思い出した。

「また十年後に皆でのぼろう！」

そう言ってくれた子どもたち。十年後、二人は十七歳と十六歳。私たち夫婦の宝とこの山は、どんな景色を見せてくれるのだろう。今からとても楽しみだ。



「悪戦苦闘の家庭づくり」

牛窓北小学校 菅原 宏都

「お父さん、次はいつ魚釣りに行くの？」

一日の仕事を終え、家に帰ると私の息子は笑顔でよくそう言います。

2017年8月、子供が小学校二年生の時に私たち家族は、東京から自然豊かで日本のエーゲ海と呼ばれる海がある岡山県瀬戸内市に移住しました。それまで私は全国転勤のある仕事をしていましたが、息子が三歳の時、幼稚園の園長先生から指摘を受け、息子が発達障害であることが判明しました。みんなと一緒に遊ぶことが出来なかったり、教室から逃げ出してしまうたり、先生の話を聞いたり理解する事が苦手で、「もう幼稚園に行きたくない。」とよく言っていました。

発達障害だと指摘されても、私は「躰をしていれば何とかなる、言い聞かせれば大丈夫だ、頑張らせよう。」と安易に考えていました。また当時の仕事の関係上、子供が起きる前に仕事に行き、寝た後に帰ってくる日々であり、休日も毎日の疲労でゴロゴロしているような状態でした。そのため育児を妻に任せっきりになってしまい、子供の日々の状態を確認することを怠っていました。その結果、子供も妻も精神的に疲れてしまっていたのでしょうか。気が付けば日々妻子ともにぐったりしていて、怒ったり、悲しんだりしていたようで、よく二人して涙を流していました。

朝早く家を出て遅く帰る日常、転勤の続く生活は、環境の変化が苦手な息子と、それをフォローしていく妻にとっては大変ではと考え、息子が小学校に入学する時に妻と話し合いました。そしてどこか一つの地域で子供をじっくりと育てたい、生き物が好きな子供のために自然豊かな環境で育てたい。また、家族が顔をそろえる時間が必要だ…。その様な思いが強くなり、考慮の末、妻の縁故地の岡山県に、その中でも自然が豊かな瀬戸内市に移住しました。

移住して現在の小学校に転入した直後は、息子は全校の児童の前で挨拶出来なかったり、逃げ回ってしまい戸惑ったりしていました。最初はそんな状態の我が子を見て先生方も困惑していたことと思いますが、徐々に息子の特性を理解して下さり、我が子に応じた対応をしていただけるようになりました。また、学校の児童達も我が子を異質な存在とせず、一人の友達として見て下さり、お陰様で運動会や音楽発表会等といったイベント事では未だ力を発揮出来ないものの、今は楽しく学校に通い、授業を受けられるようになりました。

また、現在の仕事に就いて私が日中家に居ることが多くなった事から、今までより息子の面倒を見たり宿題を教えたり、子供と一緒に遊んだりすることが増え、妻の心にも少し余裕が出来るようになった気がします。今後、我々家族がみんな幸せに暮らせるかは未だ分かりませんが、それでも家族にとってこの移住は本当に良かったと考えています。

最近では、たくさんの本が出たり、テレビで特集が組まれるようになって、発達障害という言葉が認知されるようになりましたが、発達障害にも学習障害、自閉症スペクトラム、多動性障害

等様々な特性があります。しかし、症状によったり、これらの複数の症状が混じっているケースもあり、発達障害は一括りにする事は困難です。また、病気と違い治療方法があるわけでもなく、答えもありません。私の息子も複数の症状を抱えていて、日々生活しているだけで疲労を感じたりしているのでしょう。楽しく学校に行っても、時には授業を受けられないほどかんしゃくを起こしてしまったり、疲れが溜まって、思考が停止してしまい、何事にも「嫌、嫌!」と泣きながら物事を考えられなくなってしまう事もあります。九歳の子供が気持ちを切り替えるのは容易ではありません。落ち着かせようとしてもあまりにも状態がひどくなってしまうと、時にはこちらもついカッとなってしまう事があり、反省させられます。うまくいかず妻も私もイライラして、息子もより悪い心理状態になってしまった事もあります。そういう意味では「明るい家庭づくり」というよりは「悪戦苦闘の家庭づくり」かもしれません。これからは何かにつけ、特性がある息子には困難な壁が立ちふさがらぬでしょう。それでも出来る限り、寄り添って共感し、みんなで乗り越えていこうと思っています。

もう一つ。現在自由業である私は妻と顔を合わせる事が多く、そのために妻には時折窮屈に思うことがあるようです。少しの時間離れてほどほどの距離を保つことで、我が家は程良い「明るい家庭」になります。そのために息子に合言葉を唱えてもらいます。

「お父さん、次はいつ魚釣りに行くの?」

少しの間、妻に一人の時間を作ってあげて、父子で近くの牛窓港に釣りに行き、大漁で満足気な息子が笑顔で帰り、妻も笑顔で応え出迎えた時、私たちは「明るい家庭」になります。



『木村さんと愉快的仲間たち』

邑久小学校 木村 佳苗

「生まれてきてくれてありがとう。」

私が今までで一番頑張った努力したことは二人の息子を出産したことである。しかし私は自由人であるため、出産後の子育てを頑張っているかと言われると少し疑問である。どちらかと言えば、気楽に子育てをしていると言った方が正しいと思う。そんな私が常に言っている言葉。

「私が人生の中で一番頑張ったことは二人の息子を出産したことよ。これは私の一番の自慢なの。」

「私が行動していて明確な答えがわからないのは子育て。子育ては自分の思い通りにいかないよね。だから面白いのかもね。」

こういう発言を家庭ですると主人はいつもあきれている。私が自由に生きているからである。でもこんな私を温かく見守ってくれている。息子たちも最近では私のことを温かく見守ってくれている。私が息子たちのことを温かく見守らないといけないのに、最近ではどうも逆転している感じがする。

以前は子育てに余裕がなくて、息子たちを可愛がる余裕が全くなかった。仕事をしながらの子育てはあまりにも時間が無さ過ぎて、とても悩んでいた。しかし現在では息子たちのことを声に出して、「可愛い、可愛い。」と常に言っている。息子に対するこの「可愛い」という言葉は、息子たちへの感謝の気持ちも含まれている。

約二年前、私が難病であることが分かってから、家族が劇的に変わった。元々私の家族は私に対してとても優しくあったけれど、以前にも増して私のことを気遣ってくれるようになった。息子たちも以前にも増してお手伝いをよくしてくれるようになった。家族と関わっているうちに、だんだ

んと私の考え方も前向きに変わってきた。家族のために少しでも役に立ちたいといろいろと考えていくうちに、難病を発症する前よりも、現在の方が自分の人生が楽しくなってきたことに気づいた。

今の私の楽しみは息子たちの試合の応援に行くことである。長男は陸上をまじめに頑張っていて、記録もどんどん上がってきているのが母としてとてもうれしい。誰よりも大きな声で応援していても、長男は恥ずかしがらずむしろ喜んでくれている。そんな長男のことを誇りに思っているし、私の自慢の息子である。

次男はボウリング競技をしていて、時間の無い中集中して練習に励んでいる。次男に指摘を受けて、ボウリング中は試合でも練習でもニコニコするようにしている。そうすると自然とスコアが上がってきた。しっかりしているようでまだまだ母の影響を受けているのだと思うと何だかうれしくなった。病気に負けずボウリングを頑張っている次男のことを誇りに思っているし、やはり私の自慢の息子である。

仕事をしているので、なかなか息子たちと長時間一緒に過ごすことができないが、毎日必ず息子たちとコミュニケーションを取るようになっている。反抗期だろうが疲れていようが私には関係ない。私が息子たちとコミュニケーションを取ることで、息子たちの情報を少しでも得たいのだ。私が息子たちとたくさん話をしたいのだ。

こういう私を見て主人はいつも感心している。息子たちとのコミュニケーションの取り方が上手だと褒めてくれる。息子たちの恋愛事情まで私は知っている。聞いていてとても面白いし、息子たちと話をしていると仕事の疲れも忘れてしまう。

そして私たち家族はよく笑う。とにかくよく笑う。家族一緒にいるだけで笑い合っている。だから毎日がとても楽しい。こういう家族を作ってくれた主人には本当に心から感謝している。

「ありがとう。」

家族でお互いいつも毎日何回も言い合っている。息子たちには『ありがとう』の言葉は魔法だよ、といつの日からか教えている。だから木村家では『ありがとう』の言葉で溢れている。そうしていると、何だか家族が以前にも増して明るくなってきた。笑顔も増えたとし家族みんな楽しそう。そして家ではとてもみんなリラックスしているから、私も家でとてもリラックスできる。

生まれつきの次男の病気や長男の怪我、私の難病のことなど、乗り越えないといけないことがいくつかあるが、この家族ならどんな困難でも乗り越えていけると思っている。今までも乗り越えてきたし、これまでの経験も生かせることができると思う。

笑顔と優しさで『ありがとう』の魔法の言葉があればきっと大丈夫。これからの木村家も前向きに楽しくアクティブにやっていける。私には自信がとてもある。だって私たち家族は『木村さんと愉快的仲間たち』だからね！



バースデーイベント

今城小学校 永守 志帆

夏休みに入って間もなく、小学三年生の息子が「お母さん、今年のバースデーイベントって何するん？」

と聞いてきた。息子の誕生日は八月十五日。夫婦共働きで、平日は帰りが遅くなることもある私たちが、毎年この日ばかりは仕事を調整し、朝から晩まで親子水いらずの一日を過ごす。

バースデーイベントは、息子が四歳を迎えた時から始まった。サプライズが大好きな息子に、

ただプレゼントを渡すのではつまらない。そう考えた私は、息子が寝静まってから何か良い案はないかと考えた。そして思いついたのが、なぞなぞやクイズを解きながら宝探しのようプレゼントにたどり着く、というゲームだ。朝、目覚めた息子は「悪者からの挑戦状」を見つけた。正義感が強く、ヒーローに憧れていた息子は、私の思惑通りに食いついた。寝起きにもかかわらず、息子のテンションは最高潮だ。なぞなぞの答えとなる場所に行けば、また次のなぞなぞが貼ってある。まるで、自分がヒーローになったような気分で、次々に敵（なぞなぞ）を倒していく。これは夜中に頑張った甲斐があった。張りきりすぎて、かなり寝不足な私だったが、息子の勇姿を見てイベントの成功を喜んだ。

以来、我が家では息子の誕生日といえば朝から家中を駆けずり回り、見つけたプレゼントで思う存分遊び、歌を歌いながらケーキのろうそくを吹き消す、というのが定番となったのだ。

しかし、去年はバースデーイベントの開催が危ぶまれた。私が妊娠中に切迫早産になり、医師から安静に過ごすよう指示されたのだ。数日間、入院もした。「寂しい。」甘えたい気持ちを必死にこらえ、私を心配してくれる息子の姿に涙が出た。家中に仕込むのは無理だが、少しでも楽しめるようにと、横になったままイベントの内容を考え、カードを作った。今までの中で一番小規模なものになったが、息子の喜ぶ顔が嬉しかった。

娘が生まれ、息子はすっかり兄の顔になった。「寝返りができた。」「ハイハイができた。」「一歩歩いた。」「さっき『いにい』って言った。」など、妹のちょっとした成長を見つけては、私に報告してくれる。私が忙しい時にはおもちゃや絵本で遊んだり、泣いている娘をあやしてくれたりもする。とても頼もしい存在だ。しかし、最近になって反抗的な言動も見られるようになった。ある時は、

「ごろごろせずに、はよ宿題せられえ。」

「今しようと思ったのに、お母さんに言われたらやる気なくなった。」

またある時は、

「使った物はちゃんとしまつてよ。」

「お母さんだって、出しっぱなしにしとるが。」

こんな調子で、ああ言えばこう言う。成長の証なのだとは頭では分かっているけど、色々やることがあって猫の手も借りたいような時にこう返されると、腹が立ってつきつく言ってしまう。もっと冷静に言えばよかった、せかさずに自分から行動するまで待てばよかったと、子どもたちの寝顔を見ながら反省する日々だ。

そんな息子が今年もバースデーイベントを楽しみにしているのだと思うと、母としては張り切らないわけにはいかない。例年のごとく寝静まった夜中に、作成した暗号カードを高い所や低い所、カーテンの裏など、見つけにくい場所にこっそりと忍ばせた。

翌朝、六回目のバースデーイベントが始まった。背が伸びたからか、高い所に貼ったカードも難なく見つけられてしまった。最後の一枚がなかなか見つからず苦戦していると、ハイハイが上手になった娘が、階段の一番下に貼っておいたカードを見つけた。このファインプレーに、家族みんな笑いがこぼれた。今年も、バースデーイベントは大成功だ。

一年に一度の誕生日。子どもが誕生した時の何とも言えない感動は、今でも鮮明に覚えている。無事に生まれ、元気に育ってくれていることが何よりもありがたい。それなのに日々時間に追われてせかしたり、子どもに求めすぎたりしてしまう。私は毎年、バースデーイベントの準備をしながら、あの日の感動と感謝の気持ちを思い出している。数年後には、娘のバースデーイベントを息子と一緒に考え、準備するのもおもしろそうだ。さあ、来年はどんなイベントにしようか。少し難易度を上げてみよう。想像するだけで、一年後が楽しみだ。



ガチャマシン

行幸小学校 清水 絵美

「お母さん、もうガチャしてもいい？」

我が家には、私がダンボールとペットボトルで工作したガチャマシンがあります。

最近では活躍する時が少なくなってきて寂しく思いますが、子供達が幼稚園に通うようになってから、朝の準備を一つずつマグネットシートに書いて、一つ出来たら一つ裏返していました。書いてある事がすべて出来たら、マグネットシートもすべて裏返し、一つの絵が完成します。絵が完成すると、ご褒美でガチャマシンが一回まわせます。

ガチャマシンからコロンと出て来るカプセルの中には、最初はラムネや飴、ガムやチョコレートなどの個装のおやつを入れていました。

マグネットシートに書かれている事が上手く出来なくて、怒って泣く事もありましたが、スムーズにガチャを回せた時の子供達の笑顔は、今でも印象的で心に残っています。

朝の準備がスムーズに出来るようになると、次は、小学校から帰ってからやる事を同じようにマグネットシートに書いて、一つずつ裏返して、すべて裏になると、また違う絵が完成するようにしていました。夜の八時までにマグネットシートの絵が完成すれば、ガチャマシンが一回まわせます。

この頃になると、ガチャマシンのカプセルの中身に飽きてしまって、
「えー、またコレ？」

と、残念そうにカプセルを見つめる姿が出てきたので、中身を個装のおやつだけではなく、「ジュース一本」や「お茶一杯」など、当りとハズレの要素を盛り込んでみたり、「お父さんとジャンケンをする」や「お母さんとあっちむいてホイをする」などのコミュニケーション遊びを入れてみたりして、楽しみながら生活習慣が身に付くように工夫して来ました。

初めは、自分の思ったのと違うカプセルが出たり、ハズレが当たると、「もう一回やり直す！」と言って、カプセルをわざわざガチャマシンに戻してルールを破ろうとしたり、癩癩をおこしたりして大変でしたが、慣れてくると、明日また回せば良い「ま、いっか。」と諦めて気持ちの切り替えが出来るようになってきました。

そんな子供達のちょっとした心の成長が私の楽しみになっています。

今では、ガチャマシンの中身は、「トランプの大富豪」や「オセロ」「ウノ」「テーブル卓球」とコミュニケーション遊び中心で、夜の八時までにやるべき事が出来て、何をして遊ぼうか迷った時に回して遊びを選んでいきます。

この様に、わが家のガチャマシンは子供達の成長とともにカプセルの中身も変化してきました。出番が少なくなって来ているのは寂しいですが、まだまだ私自身や子供達に課題は残されていると感じているので、これからも、ガチャマシンとともに成長を楽しんでいきたいと思っています。

瀬戸内市優良賞〔小学生の部・中学生の部〕受賞者一覧

題名	所属	氏名
らくがきじけん	邑久小学校 1年	松島 蒼也
ぼくのみそしる	国府小学校 1年	内海 橙太
ありがとう、たすかったよ	今城小学校 2年	佐藤 峻斗
あまきの入いん	行幸小学校 2年	武元 瑞希
大きくなったゆいくん	邑久小学校 3年	片山 和
お母さんのパンはサイコー	行幸小学校 3年	酒井 宏斗
ぼくの妹	今城小学校 4年	瀬濱 将悟
ちょっととぼけたわたしの神様	国府小学校 4年	原田 茜音
やさしいおばあちゃん	牛窓西小学校 5年	池田 陽
じいじの背中	裳掛小学校 5年	小川 椅吏
ピアノの練習	今城小学校 6年	小林 希弥
ひいばあちゃんのひざ	国府小学校 6年	大河原 一稀
母の仕事	邑久中学校 1年	那須 楓花
クラリネットと家族と私	長船中学校 1年	横山 千乃
家族の声援とともに歩む陸上生活	邑久中学校 2年	木村 歩
「父のように」	長船中学校 2年	田中 琴彩
私の大好きな居場所	牛窓中学校 3年	高橋 怜愛
本当のあたり前とは	邑久中学校 3年	赤澤 駿一

瀬戸内市佳作賞〔小学生の部・中学生の部〕受賞者一覧

題名	所属	氏名
わたしのかぞく	牛窓東小学校 1年	岡崎 咲和
すいかわり	牛窓西小学校 1年	井手 彩乃
「あふろ」	牛窓北小学校 1年	山本 絢斗
わたしはピアニスト	邑久小学校 1年	山本 愛莉
わたしのかぞく	邑久小学校 1年	上山 希花
たのしかったよ おてつだい	今城小学校 1年	的場 美弥
ぼくのおとうと	裳掛小学校 1年	吉崎 吏音
ぼくのなまえ	美和小学校 1年	野崎 直音
なつやすみにしたおてつだい	国府小学校 1年	藤原 ひかり
サッカーとぼくとおとうさん	行幸小学校 1年	竹本 蒼佑
わたしはねこのおねえさん	行幸小学校 1年	播本 花
ばあばとハイタッチ	牛窓東小学校 2年	床 季那保
いっぱいあるよ かぞくのいいところ	牛窓西小学校 2年	木下 百花
「おばあちゃんはミカン名人」	牛窓北小学校 2年	柏原 幸芽
おとうさんのしごと	邑久小学校 2年	田村 千糸
わたしのおばあちゃん	邑久小学校 2年	河井 莉心
かぞくで秋まつり	邑久小学校 2年	河合 優奈
ぼくのおばあちゃん	裳掛小学校 2年	片山 廉晴
いつも大いそがしなおかあさん	美和小学校 2年	門田 杏沙
ながしそうめん	国府小学校 2年	目賀 稀乃華
わたしのライバル	国府小学校 2年	新井 栞奈
ぼくのもくひょう	行幸小学校 2年	藤田 陽翔
ぼくのおじいちゃん	牛窓東小学校 3年	木下 智裕
お父さんのマッサージ	牛窓西小学校 3年	池田 悠
「もっとおいしく作りたい米たき」	牛窓北小学校 3年	森 伊織
登校の朝	邑久小学校 3年	大谷 里奈

題名	所属	氏名
ぼくとお父さんのきより	邑久小学校 3年	森川 楓
九州のおばあちゃん	邑久小学校 3年	川野 颯平
「おいしい」はまほうのことば	今城小学校 3年	永守 創
1等賞	美和小学校 3年	近藤 碧
ぼくのおばあちゃん	国府小学校 3年	山田 陽斗
ひさしくんとさとしくん	行幸小学校 3年	野田 篤史
たのしいスタンプあつめ	牛窓東小学校 4年	武内 ひまり
おばあちゃんと私	牛窓西小学校 4年	畑中 夕芽
「わが家の夏の元気ジュース」	牛窓北小学校 4年	真木 心暖
私のおばあちゃん	邑久小学校 4年	細野 なみ杏
お手つだいの大切さ	邑久小学校 4年	柴田 亜由果
ぼくとお姉ちゃん	邑久小学校 4年	弘保 玲旺
ぼくが四年生になって	今城小学校 4年	太田 大翔
わたしの妹	裳掛小学校 4年	河崎 紗良
私の家族	美和小学校 4年	福池 咲結
人の役に立つこと	国府小学校 4年	長井 優沙
わたしのお母さん	行幸小学校 4年	武内 美空
一日お母さん	牛窓東小学校 5年	武内 桜
「おばあちゃんは縁の下の力持ち」	牛窓北小学校 5年	木山 滉
私のおじいちゃんとさくら	邑久小学校 5年	服部 友香
わたしは玉子焼き名人	邑久小学校 5年	佐藤 芙季
「お父さん、ありがとう」	今城小学校 5年	岩上 壺成
ぼくの弟	美和小学校 5年	中西 朝陽
ぼくと野球と家族	国府小学校 5年	嵯峨 山大稀
わたしは妹のおうえん隊	行幸小学校 5年	酒井 佑月
テレビがこわれた…	牛窓東小学校 6年	黒井 真由
ぼくと家族の新しいスタート	牛窓西小学校 6年	金光 一路
お母さんのおいしい手料理	邑久小学校 6年	山口 優茉
私のもう一つのわが家	邑久小学校 6年	神谷 凧穂
私にできること	邑久小学校 6年	山本 有紗
家族のためにできること	邑久小学校 6年	川崎 己太朗
二つの顔を持つお兄ちゃん	裳掛小学校 6年	立岡 優梨奈
私がお母さんに叱られる理由	美和小学校 6年	福池 実
祖父母	邑久中学校 1年	井上 日葵
祖母の手術	邑久中学校 1年	佐藤 希和
妹の笑顔	邑久中学校 1年	小林 紗綺
家族の支え	長船中学校 1年	中上 楓香
おはぎが食べたい	長船中学校 1年	竹中 祥貴
おばあちゃん。	牛窓中学校 2年	田淵 有稀
母のお弁当	邑久中学校 2年	大島 千波
ばあちゃん	邑久中学校 2年	林 莉子
「おかえり」の声	長船中学校 2年	藤原 亜花音
我が家の欠点	長船中学校 2年	児玉 咲
家族、家庭から学んだこと	邑久中学校 3年	吉田 津麦
無条件の愛	邑久中学校 3年	坂本 心華
笑顔のあふれる家庭	邑久中学校 3年	野崎 忠宏
大好きな人	長船中学校 3年	田中 美羽
祖母の思い出	長船中学校 3年	木村 陽向
大切な人	長船中学校 3年	北谷 優明



ほがらか家族

明るい家庭づくり作文集
(瀬戸内市優秀賞受賞作品)

令和2年2月発行

編集発行

瀬戸内市教育委員会

岡山県青少年育成県民会議瀬戸内地区連絡協議会

〒701-4392 瀬戸内市牛窓町牛窓4911

瀬戸内市教育委員会社会教育課内